

## 職業実践専門課程の基本情報について

学 校 名	設置認可年月日	校 長 名	所 在 地			
北九州保育福祉 専門学校	昭和44年 2月 1日 (文大教第94号)	上森 哲生	〒800-0343 福岡県京都郡苅田町上片島1575番地 (電話) 0930-23-3213			
設 置 者 名	設立認可年月日	代 表 者 名	所 在 地			
学校法人戸早学園	昭和40年 7月28日	戸早 秀暢	〒800-0343 福岡県京都郡苅田町上片島1575番地 (電話) 0930-23-3213			
目 的	教育基本法等の関係法規及び本学の建学の精神に基づき、幼稚園教諭・保育士として必要な専門的知識と技能を授け、人格の陶冶に務め、正しい使命感を体得させ、教育的愛情を培い、真に有能な人材を育成することを目的とする。					
分野	課程名	学科名	修業年限 (昼、夜別)	全課程の修了に 必要な総授業時 数又は総単位数	専門士の付与	高度専門士の付与
教育・社 会福祉	教育専門課 程	幼児教育科	2年(昼)	84単位	平成7年1月23日 (文部省告示7号)	—
教育課程	講義	演習	実験	実習	実技	
	34単位	53単位	単位	11単位	1単位	
生徒総定員	生徒実員	専任教員数	兼任教員数	総教員数		
200人	85人	15人	18人	33人		
学期制度	■前期：4月 1日～9月20日 ■後期：9月21日～3月31日			成績評価	■成績表 (有・無) ■成績評価の基準・方法について 試験による点数と受講態度などを加味し、100点を満点とする整数によって評価する。	
長期休み	■学年始め：4月1日 ■夏 季：8月1日～8月31日 ■冬 季：12月25日～1月7日 ■学 年 末：3月21日～3月31日			卒業・進級条件	各学年において規定された科目をすべて受講し、成績評価において60点以上の場合、進級もしくは卒業を認定する。	
生徒指導	■クラス担任制 (有・無) ■長期欠席者への指導等の対応 長期欠席者はいないが、長期欠席は無断欠席に起因することが多いので、確実に連絡を取って欠席理由の把握に努める。欠席が続くときは、保護者と密に連携してその改善を図っている。			課外活動	■課外活動の種類 ■サークル活動 (有・無)	

就職等の状況	<b>■主な就職先、業界等</b> 幼稚園、保育園、市職員 児童養護施設、障害児施設 <b>■就職率</b> 100% <b>■卒業者に占める就職者の割合</b> 93.2% <b>■その他（任意）</b> （平成28年度卒業者に関する平成29年4月時点の 情報）	主な資格・検定	・幼稚園教諭免許 ・保育士資格 ・専門士
中途退学の現状	<b>■中途退学者</b> 5名 <b>■中退率</b> 5.2% 平成28年4月1日在学者 97名（平成28年4月入学者を含む） 平成29年3月31日在学者 92名（平成29年3月卒業生を含む） <b>■中途退学の主な理由</b> 家庭の経済的理由、進路変更、学力不足 <b>■中退防止のための取組</b> 奨学金制度の説明。授業の内容について噛み砕いて説明を行うよう、全教員で共通理解して取り組むようにしている。担任を中心に個別面談を行う。		
ホームページ	URL: <a href="http://www.tohaya.jp/khfc/">http://www.tohaya.jp/khfc/</a>		

※1 「大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職（内定）状況調査」の定義による。

- ① 「就職率」については、就職希望者に占める就職者の割合をいい、調査時点における就職者数を就職希望者で除したものとする。
- ② 「就職率」における「就職者」とは、正規の職員（1年以上の非正規の職員として就職した者を含む）として最終的に就職した者（企業等から採用通知などが出された者）をいう。
- ③ 「就職率」における「就職希望者」とは、卒業年度中に就職活動を行い、大学等卒業後速やかに就職することを希望する者をいい、卒業後の進路として「進学」「自営業」「家事手伝い」「留年」「資格取得」などを希望する者は含まない。

※ 「就職（内定）状況調査」における調査対象の抽出のための母集団となる学生等は、卒業年次に在籍している学生等としている。ただし、卒業の見込みのない者、休学中の者、留学生、聴講生、科目等履修生、研究生及び夜間部、医学科、歯学科、獣医学科、大学院、専攻科、別科の学生は除いている。

※2 「学校基本調査」の定義による。

全卒業生数のうち就職者総数の占める割合をいう。

「就職」とは給料、賃金、報酬その他経常的な収入を得る仕事に就くことをいう。自家・自営業に就いた者は含めるが、家事手伝い、臨時的な仕事に就いた者は就職者とはしない（就職したが就職先が不明の者は就職者として扱う。）

## 1. 教育課程の編成

### (教育課程の編成における企業等との連携に関する基本方針)

本校の教育課程に関して、幼稚園教諭、保育士として必要な実践的かつ専門的な能力を育成すべく構成されるよう、その内容を検討し、職業教育水準の向上を図ることを目的とする。併せて、委員会で検討された内容は、開催された会議ごとに意見を取りまとめた上で、学校内に公表し、教育課程の改善に活用することとする。

### (教育課程編成委員会等の全委員の名簿)

平成 29 年 12 月 1 日現在

名 前	所 属
宮 崎 優	社会福祉法人 みやこ老人ホーム みやこの苑 施設長
三 笠 直 樹	社会福祉法人緑風会特別養護老人ホーム吉富鳳寿園施設長 吉富町社会福協議会理事
船 越 美 穂	国立大学法人 福岡教育大学 教授
深 堀 和 枝	社会福祉法人 北九州市福祉事業団 事業課 保育指導監
高 原 恵 子	学校法人黒木学園 徳力団地幼稚園 園長
上 森 哲 生	北九州保育福祉専門学校 校長
河 合 倫 子	北九州保育福祉専門学校 教育課長
大 城 一 之	北九州保育福祉専門学校 学生支援室長
原 本 賢 一	北九州保育福祉専門学校 幼児教育科長
廣 藤 智 之	北九州保育福祉専門学校 介護福祉科長
牟 田 博	北九州保育福祉専門学校 事務長
進 晃 一	北九州保育福祉専門学校 教務課
上 鶴 郁 美	北九州保育福祉専門学校 教務課

### (開催日時)

平成 28 年度

第 1 回 平成 28 年 6 月 21 日 13:56~15:00

第 2 回 平成 28 年 12 月 6 日 13:56~15:00

平成 29 年度

第 1 回 平成 29 年 6 月 20 日 14:00~予定

第 2 回 平成 29 年 12 月 12 日 14:00~予定

## 2. 主な実習・演習等

### (実習・演習等における企業等との連携に関する基本方針)

各園での実習においては、幼稚園教諭及び保育士としての必要な資質・能力・技術を習得させる。乳幼児とともに活動を通して、乳幼児期の全面的な発育・発達の在り方や、個人や集団の成長過程の観察・記録の仕方、及び幼児を取り巻く環境構成等を学習させ、乳幼児のみならず、同僚や保護者との接し方も学べるようにお願いをしている。このように、多くの人との出会いから保育者としての資質を高め、教育的愛情や教育に対する使命感や責任感の醸成を目指し、人間としての大きな成長を期している。

科 目 名	科 目 概 要	連 携 企 業 等
教育実習 I	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・おもいやり」「観察眼の育成」を目指して行う。</p> <p>この実習は幼稚園での保育に参加し、幼児への理解を深めるとともに、幼稚園の機能と役割や幼稚園教諭の職務内容について学ぶことをねらいとしている。</p> <p>実習園の行事や実習生の状況に応じて、見学・観察実習、参加実習、指導実習など様々な形式で実習を行い学ぶ。更に、この実習を通して学んだ課題を明確化し、幼</p>	<p>附属苅田幼稚園、日の丸幼稚園、西門司幼稚園、こじか幼稚園、フレンズ幼稚園、きらきら星幼稚園 他</p>

	<p>稚園教諭としての専門性を高める機会とする。</p>	
教育実習Ⅱ	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力」「他者への配慮・おもいやり」「観察眼の育成」を目指して行う。</p> <p>この実習では教育実習における保育実践を通して、幼稚園教諭として必要な資質・能力・技術を習得する。また幼稚園の様々な行事への参加や通常の教育活動及びそれ以外の活動を通して、教育的愛情や教育に対する使命感や責任感を養うことをねらいとしている。</p> <p>実習園の行事や実習生の状況に応じて、観察・参加実習、指導実習など様々な形で実習を行う。</p> <p>この実習を通して学んだ課題を明確化し、幼稚園教諭としての専門性を高める機会とする。</p>	<p>附属荻田幼稚園、日の丸幼稚園、西門司幼稚園、こじか幼稚園、フレンズ幼稚園、きらきら星幼稚園 他</p>
保育実習Ⅰ（保育所）	<p>実習は、保育実習での意義や目的を理解するとともに、「コミュニケーション能力の育成」「他者への思いやり」「観察力の育成」を目指して行う。併せて、子どもの最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務について理解する。</p> <p>この実習を通して学んだ課題を明確化し、次回の実習へ前向きに取り組めるようにする。</p>	<p>浄照保育園、日豊保育園、あけぼの愛育保育園、コスモス保育園、みなと保育所、若園保育所、むつみ保育園、ひかり保育園、城野保育園、他</p>
保育実習Ⅰ（施設）	<p>施設実習は保育所以外の福祉施設に行き学校で学んだことを体験し、保育士として必要な技術や支援の実際を知る。また、そこでは保護者などどのようなコミュニケーションを図っているかを学び、コミュニケーション能力の向上に役立てる。一年次で学習してきた発達の過程や育ち、様々な環境の違いを現場の子ども（利用者）の姿から読み取り、現状とその背後にあるものをイメージすることができるようにする。実習の目標が達成できたかを自己評価し、自己覚知につなげる。</p>	<p>児童相談所北九州市子ども総合センター、北九州乳児院、児童養護施設双葉学園、児童発達支援センター行橋みらい学園、障害者支援施設荻田学園 北九州市福祉事業団 他</p>
保育実習Ⅱ	<p>保育所保育士として必要な姿勢や態度及び指導の方法・技術等を習得するとともに、「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・思いやり」「観察力の育成」を目指して行う。</p> <p>「保育実習Ⅰ（保育所）」での保育所実習の経験をもとに、自ら実習先保育所を選択して実習することにより、保育所の目的と機能課題等より深く理解する。</p>	<p>行事保育園、第1ひまわり保育園、コスモス保育園、あけぼの愛育保育園、清水保育所、若園保育所 他</p>
保育実習Ⅲ	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・おもいやり」「観察力の育成」を目指して行われる。</p> <p>この実習では主に居住型福祉施設等で職務遂行を行う保育士として必要な能力や技能を充実・伸張することをねらいとしている。具体的には子どもや利用者のニーズについて理解し、その対応方法や援助計画の立案と実践、家族とのコミュニケーションの方法や地域との連携等の実際を学ぶ。さらにこの実習を通して学んだ課題を明確化し、保育士としての専門性を高める機会として位置付ける。</p>	<p>北九州乳児院、児童養護施設天使育児園、児童発達支援センター光の子学園、障害者支援施設瑞穂学園 他</p>

### 3. 教員の研修等

#### (教員の研修等の基本方針)

企業・団体等が実施する教育研修・実技研修等に教員に参加させ、自らの資質の向上を図るとともに学生への指導力の向上にも努めさせる。

教員の経験年数、専門性に関係なく、積極的に研修に参加させる。これらにより、他科目との関わり、学生や幼児との関わりを理解することにつながり、しいては自らの専門科目を見直すきっかけとなる。

### 4. 学校関係者評価

#### (学校関係者評価委員会の全委員の名簿)

平成 29 年 5 月 1 日現在

委員

名 前	所 属
和 田 英 気	西日本コンピュータ㈱ 取締役
久 篠 守 生	久篠司法書士事務所 代表
和 田 誠	学校法人 和田学園 荻田第一幼稚園 園長
三 笠 直 樹	社会福祉法人 緑風会 特別養護老人ホーム 吉富鳳寿園 施設長
舩 尾 伸 広	特定医療法人 敬愛会 新田原聖母病院 リハビリテーション科副主任
八 木 哲 平	一般社団法人 日本海員掖済会門司掖済会病院 リハビリテーション科
片 山 泰 代	医療法人 矢津内科消化器科クリニック 看護師長

#### (学校関係者評価結果の公表方法)

URL: <http://www.tohaya.jp/khfc/>

### 5. 情報提供

#### (情報提供の方法)

URL: <http://www.tohaya.jp/khfc/>

授業科目等の概要

(教育専門課程 幼児教育科) 平成29年度										
分類			授業科目名	授業科目概要	配当年次・学期	授業時数	単位数	授業方法		
必修	選択必修	自由選択						講義	演習	実験・実習・実技
		○	音楽	<p>保育現場で行われる音楽活動や指導の際に必要な、音楽理論（楽典）の基礎を学ぶ。特に、リズムと読譜の学習に重点を置き、ピアノ実技との関連性についても意識をもたせる。また、楽器を使用したグループ発表を行い、様々な奏法やその可能性を学び、音楽が子どもの育ちに深く関わりをもつことを理解する。</p> <p>グループ発表を通し一人一人がコミュニケーション能力を養い、音楽を介し他者との共感性をもてるようにする。理論と並行して、実習で使用される生活の歌や子どもの歌などを紹介し、音楽の役割を学び保育者として音楽を楽しむ心を育む。授業を通して、音楽の魅力や学生が本来もつ感性を再発見出来るよう指導する。</p>	1前	30	2	○		
○			日本国憲法	<p>現在の日本は、さまざまな問題が山積しています。新聞等マスメディアによって日々報じられる問題は、政治も経済も教育も、何もかも原因をたどっていくとすべては憲法に行き着きます。このような社会問題を憲法学の視点から考察することは、教育現場では極めて重要です。本講義では、日本国民としてまた社会人として必要とされる憲法の素養を身につけるために、憲法学の内容を総体的に講述していきます。併せて適宜テーマに関連した判例及び新聞記事を学生の皆さんと検討します。</p>	1後	30	2	○		
		○	人権教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児教育科の専任教員の専門性を活かし、各々の分野における人権をテーマにした講義を展開する。</li> <li>・ 自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度を身につけさせる育成を重点化して実施する。</li> <li>・ 複数の教員や学生の意見を聞くことで、様々な考え方や価値観があることに気づき、学生一人一人の違いを受け入れることも視野に入れ展開する。</li> </ul>	1前	15	1	○		

○		英語Ⅰ	<p>幼児教育の現場で必要とされる外国人の保護者との意思疎通が図れるように英語力を高める授業展開を行う。</p> <p>実践的なコミュニケーション能力を育成するには視聴覚が重要となるため、CDやビデオなどの視聴覚教材を用いて、知りたい情報や相手側の意向などを理解する。中学・高校で学んだ文法が理解できているかを確認し、復習を兼ねた保育英語を学習していく。グループ活動において、幼児に理解できる簡単なゲームや英語でのリズム遊びを学び、保育現場で活用ができるように取り組んでいきたい。</p>	1 前	30	1	○		
○		英語Ⅱ	<p>国際化時代が到来し、多くの異なった文化背景をもつ子どもたちが増え、独特な文化や生活習慣の違いから誤解が生まれることもある。「言葉」は大きな武器になるため、リスニング力を身につけ、相手方の配慮が行き届く人材を育成したい。保護者との見解が相違しないようにコミュニケーション言語能力を高め、レクリエーションを取り入れながらグループ活動を実施したい。</p>	1 後	30	1	○		
○		体育講義	<p>高校での体育・保健の学習を基礎として、生涯を健康に生きるために必要な人間の身体特性について、興味・関心をもち、理解する。また、各個人が講義をもとに実践することから、保育者として他者への配慮の向上につながればと考え下記の項目を実施する。</p>	1 前	15	1	○		
○		体育実技	<p>スポーツ・身体運動を通して、生涯にわたる心身の健康の保持・増進を実践を通して学ぶ。また、グループワークを通してコミュニケーション能力の育成を図る。</p>	1 前	45	1	○		
○		情報機器演習Ⅰ	<p>保育現場では今まで手書きであった保育日誌や月案・日案、園だよりもパソコンでの作業に移行しつつあり、学校を卒業した学生にはパソコン業務が求められている。様々な演習課題にて知識や技術を習得させ、感じたことや考えたことを文書に反映させ、自分なりの表現ができるように学習を深めていく。またインターネット上にある保育に関する挿絵や風景・人物の写真をパソコンに取り入れ、編集加工を加えた全体的なバランスを整った制作物が作成できるような授業展開を考えている。またExcelでは四則演算を使用して簡単な数式を入力し、計算能力を高めていく。</p>	2 前	30	1	○		

○		情報機器演習Ⅱ	<p>情報化の進展に伴う新しい問題として情報端末機器（PC・タブレット・スマートフォンなど）によるネット依存症や詐欺、対人中傷が生じているため、取扱に注意することを理解する。</p> <p>また、Power Pointでプレゼンテーションを作ることにより、感じたことや考えたことを自分なりに表現する感性を磨いてもらいたい。またプレゼン発表に関し、共通の目的を見だし自分の思ったことを相手に伝え、相手が考えていることを理解して欲しい。</p>	2後	30	1	○
○		音楽Ⅰ	<p>音楽Ⅰは器楽：ピアノと声楽との授業を行い、保育者として必要なピアノ技術および、発声法と歌唱法の基礎を習得する。授業はそれぞれの特徴に応じた内容を展開し、総合的な音楽技術を身につけられるように指導するとともに、その後の音楽活動を子どもと楽しく実践できる人材育成を目指す。保育現場で歌われる様々な曲に触れ、活動の中でコミュニケーションを図り、一人一人が音楽を楽しむ力をつけ自らの感性を磨いていく。</p>	1前	60	2	○
	○	音楽Ⅱ	<p>音楽Ⅱは器楽：ピアノと声楽との授業を行い、保育者として必要なピアノ技術および、発声法と歌唱法の基礎を習得する。授業はそれぞれの特徴に応じた内容を展開し、総合的な音楽技術を身につけられるように指導するとともに、その後の音楽活動を子どもと楽しく実践できる人材育成を目指す。保育現場で歌われる様々な曲に触れ、活動の中でコミュニケーションを図り、一人一人が音楽を楽しむ力をもち自らの感性を磨いていく。</p>	1後	60	2	○
○		図画工作Ⅰ－①	<p>図画工作には得手不得手があるといわれるが、一般的によく言う「センス」や「絵心」なるものは、すべての人が生まれながらにもっており、磨いてこそ光るものである。苦手意識のある学生も、今までの概念や上手下手にこだわらず、まずは楽しみ、感じるころから始めて欲しい。楽しさを感じられるようになれば、自然と研究心も高まり、学びも深まっていく。図画工作Ⅰ－①では、できるだけ親しみやすい造形体験を重ねながら、実際の保育につながる教材となるよう配慮したカリキュラムとなっている。作品制作を通して、保育における造形表現の知識、技術、感性、また、観察眼やコミュニケーション能力を獲得していく。</p>	1前	30	1	○



○	図画工作 I-②	「図画工作 I-①」において個人制作を十分に楽しむことができたなら、「図画工作 I-②」では自身の表現だけでなく、子どもたちと一緒に造形活動を楽しむための方法へ意識を向け始めたい。今までの学びを踏まえながら実習時期に合わせて教材研究を行うことで、保育の大きな流れの一部としての造形活動を感じることができるよう、より現場を想定したカリキュラムとなっている。「図画工作 I-①」から引き続き、作品制作を通して保育における造形表現の知識、技術、感性、また、観察眼やコミュニケーション能力を高めていく。	1 後	30	1	○
○	体育 I	幼児の運動遊びに関する教材の取り扱い方や援助の方法について理解を深める。アイスブレイクやグループワークを通してコミュニケーション能力の育成を図りたいと考えている。運動遊びの基礎技能を身につけさせたい。	1 前	30	1	○
○	体育 II	幼児の運動遊びに関する教材の取り扱い方や援助の方法について理解を深める。アイスブレイクやグループワークを通してコミュニケーション能力の育成を図りたいと考えている。授業終盤、集大成として運動会を企画・実施する。	1 後	30	1	○
○	国語 I	次の二点を授業の基本とする。 1. 子どもの発達過程にそって、言葉を育てる演習に取り組む。 2. 「ことば」を育むための保育者自身の言葉のありかたを、子どもへの言葉の指導とともに学ぶ。	1 前	30	1	○
○	国語 II	次の三点を授業の基本とする。 1. 子どもの発達過程にそって、言葉を育てる演習に取り組む。 2. 「ことば」を育むための保育者自身の言葉のありかたを、子どもへの言葉の指導とともに学ぶ。 3. 「ことば」を育てる保育手段としての、記録、連絡（手紙など）、話し合いの方法を身につける。	1 後	30	1	○
○	幼児と算数	子どもの発達と学びは幼児期から児童期へと連続してはいるものの、教育課程は活動中心から各教科等中心になる。そこで、小学校の教育課程について理解を図る。小学校の教育課程を基準として、幼稚園教育の教育課程をみることで「学びの芽生え」とそのための教育課程の在り方について考えていくようにする。そこで、算数科の各領域の内容を視点に遊び等の具体	1 前	15	1	○

			例をもとに分析的にみる。分析的に見るに当たっては、グループでの活動や学び合いを取り入れた授業を構成する。					
		○	幼児と生活	幼稚園教育との接続の役割も担う生活科について「具体的な活動や体験」が、生活科の内容に関する「気づき」を生み、自立への基礎を養うことにつながっていること及び生活科の目標・内容・学習指導方法について理解を図る。このことは、遊び等の活動から「学び」をつくる幼稚園の教育課程の充実に寄与できる。授業方法は、グループでの活動や学び合いを仕組んで授業を構成する。	1 前	15	1	○
○			教職概論	教育制度の仕組みや教育活動の内容と諸課題、教師の責任と権限、教職の意義と教員の役割、職業としての教職に関する基礎的な事項、教員の資質能力の向上、外部評価、学校関係者評価などの地域連携も視野に入れて、学習する。児童生徒はもちろん、保護者や周囲の関係者などとのコミュニケーション力向上についても、学習を深めてゆく。また、毎時間、授業時間内でエピソードを提示し、より実践的な、具体的なイメージの形成に向けて取り組みたい。講義ではあるが、学生とのやりとりや発表を通して積極的に取り組む姿勢保持の工夫としたい。 また、他人への配慮やコミュニケーション力の育成を図りたい。	1 後	30	2	○
○			教育学概論	子どもについての（大人の）捉え方の歴史や、〈遊び〉〈学び〉の意義についての学説の系譜などを学ぶ。さらに、子どもや発達をめぐって近年登場してきた学説や考え方などを、背景を含めて学ぶ。 なお、授業のスタイルは、基本的に講義形式で進められる。ただし、学生がグループ活動や意見発表、制作などをする機会が適宜設けられるので、学生は積極的・主体的に取り組もうという気持ちを常をもって、この授業に参加することを期待したい。	1 前	30	2	○
○			教育心理学	人は誰でも知りたい、分かってほしいという思いをもっている。新しいことを知り、理解できた時には「わかった!」「できた!」「なるほど!」という喜びを感じる。生き生きと主体的に学ぶことを支えるために、学ぶ過程と学ぶ意欲の理解を目指す。	1 後	30	2	○

○		教育課程総論	幼稚園では、入園から終了までを見通し、幼児とともにどのような園生活をつくりだしていくか、園長を中心に十分に検討することが必要で、保育の全体計画である教育課程の編成が、保育の質に関わる重要な課題であることを捉えさせたい。また、将来その一員として教育課程の編成に関わらなければならないことを自覚させることも必要である。そのために、具体的な事例をもとに学生の考えを求める場を設定し、幼児や先生、周りの環境などに配慮するとともに、他者の考えを自分の中に取り入れ、考えをさらに深めさせることができる視点を身につけさせたいと考え、以下の計画で進めていくことにする。	1前	30	2	○		
○		健康指導法 I	人間が生きていくためのベースである健康な生活の基盤をどう育てるかについて学ぶ。現代社会の現状は、子ども達が健康で安全な生活を送るには、ふさわしいとは言えなくなってきており、幼児教育施設が果たす役割は益々大きくなってきている。この授業では身体の発達及び運動発達を理解し、関わりの留意点や指導の視点を学ぶことで観察眼の育成に努めたいと考えている。幼児の健康、または子どもに必要な体験とは何かをしっかりと学ばせたい。	1後	30	1	○		
○		健康指導法 II	健康指導法 I を受けて、さらに深い高度な知識の習得をめざすとともに、保育の現場で役立つ実践的な内容をベースに授業を進めます。また、具体的・運動的側面だけでなく、精神的な健康についても、多くの問題・課題がある現代において、保育者のどのような配慮が必要であるのか、保育者の役割とは何か、授業を通して考えていく。	2後	30	1	○		
○		人間関係指導法 I	領域「人間関係」のねらい及び内容の理解を深め、人との関わりの重要性を総合的に学ぶ。子どもは、生活全体を通じて人と関わることを喜び、人を信頼し、様々な葛藤を乗り越えながら新たな人間関係を広げてゆく。 本演習では、子どもの豊かな生活の基盤となる人間関係の大切さを考えながら5領域すべてに関連付け、事例を通して人間関係指導法を習得してほしいと考えている。	2前	30	1	○		
○		人間関係指導法 II	人間関係指導法 I で学んだ、乳幼児期を通じた対人能力や人間関係の発達に関する理解を基礎として、本演習では事例に沿った実践を多く取り入れながら学ぶ。テキ	2後	30	1	○		

				ストによる学習だけでなくビデオを視聴するなど、実際の子どもを想定することで人間関係指導法についての理解を深め、保育者の役割を考えてゆく。						
○			環境指導法Ⅰ	保育内容「領域」に関わる基礎的な事項を含めて意義を学び、幼児理解を深める。人的環境としての保育者自身が環境に対して、親しみ、興味をもって積極的に関わり、重要性に気づき、社会的スキル指導を実践事例の基に学ぶ。	2 前	30	1		○	
	○		環境指導法Ⅱ	「環境と関わる力」を育てる保育内容について考え、自ら幼児教育に必要な環境能力「環境を見る目」の向上を図る。「安全」の問題を保育内容「環境」を通して考える。	2 後	30	1		○	
○			ことば指導法Ⅰ	言葉は自分の考えや気持ちを伝えるための手段で、人と人が関わりあって生きていくために必要なものである。子どもの言葉の育ちには、‘ふれあい’と‘言葉’が大切であり、人と人がつながるための言葉を大切にしてほしい。授業では乳幼児絵本のガイドブックでの学びやふれあい遊び・ことば遊びなど、実践の体験を積極的に取り組みたい。乳幼児期は、言葉に対する信頼感を育て、言葉を通じてコミュニケーション能力の基礎を培ううえで極めて重要な時期であることや、また子ども達に絵本を心を込めて読むことで子どもの言葉が育ち、豊かな想像力を育み、今ここに生きる喜びや生きる力を育てていくことを学ぶ。	1 後	30	1		○	
	○		ことば指導法Ⅱ	言葉は自分の考えや気持ちを伝えるための手段で、人と人が関わりあって生きていくために必要なものである。ことば指導法Ⅰで学んだ言葉の発達を理解して、保育実技の製作活動やグループでのおはなし会に取り組む。授業では絵本の読み聞かせやことば遊びなど実技体験を積極的に取り組み、実際におはなし会のプログラムを考えてグループごとに発表をしたり、附属幼稚園の子どもたちに実践することで学びを深める。授業では、「コミュニケーション能力の育成」「配慮への配慮・おもいやり」「観察眼の育成」を目指して行う。	2 後	30	1		○	
○			音楽表現指導法Ⅰ	音楽表現指導法Ⅰでは、子どもの様々な表現活動を学び、そのための表現技術を習得する。また、子どもの表現する意欲を引き出し、表現活動を楽しむために必要な保育者の援助を学ぶ。子どもの音楽表現活動	1 後	30	1		○	

			<p>を指導するには、子どもが楽しめる教材選択、活動内容を発達に即した遊びに展開する技術、活動内容を子どもの育ちに関連付ける知識、子どもの表現意欲を受け止め伸ばしていく感性など、多くのことが求められる。</p> <p>授業内でのグループ発表などを通して自己表現することの楽しさを経験し、音楽と子どもとの関わりを知る中で、豊かな人間性を身につけた人材育成を目指す。また、グループ発表を通して客観的に観察する力を養い、自らの音楽表現技術向上に役立てていけるように指導する。</p>					
	○	音楽表現指導法Ⅱ	<p>音楽表現指導法Ⅱでは、子どもの身体表現を中心とした表現活動を学び、そのための表現技術を習得する。また、自閉症や障害のある子どもに対しての音楽表現活動を学ぶ。子どもの表現する意欲を引き出し、表現活動を楽しむために必要な保育者の援助を学ぶ。子どもの音楽表現活動を指導するには、子どもが楽しめる教材選択、活動内容を発達に即した遊びに展開する技術、活動内容を子どもの育ちに関連付ける知識、子どもの表現意欲を受け止め伸ばしていく感性など、多くのことが求められる。授業内でのグループ発表などを通して自己表現することの楽しさを経験し、音楽と子どもとの関わりを知る中で、豊かな人間性を身に付けた人材育成を目指す。</p>	2 後	30	1		○
	○	造形表現指導法Ⅰ	<p>図画工作Ⅰでの経験を踏まえ、さらなる表現力の向上を目指すとともに、領域〈表現〉のねらい及び内容と造形表現について理解を深めたい。子ども一人一人の表現したいという気持ちを受け止め、その意欲を十分に発揮させることができるよう、実際の現場を想定しながら作品制作を行い、造形活動を発展させるための環境構成や援助について考察していく。後半のグループワークにおいてはコミュニケーション能力を高め、共同制作における計画性、個々の役割や他者への配慮について併せて学んでいく。</p>	2 前	30	1		○
	○	造形表現指導法Ⅱ	<p>造形表現指導法Ⅰでの経験を踏まえ、さらなる表現力の向上を目指すとともに、領域〈表現〉のねらい及び内容と造形表現について理解を深めたい。より多くの制作体験を重ねながら、後半は実習での反省や考察をいかし、現場を想定しながらグループワーク形式での設定保育シュミレーションを行う。学生間での学び合いを深めなが</p>	2 後	30	1		○

			ら、造形活動を発展させるための教材研究や環境構成、そのための細やかな準備や指導上の留意点について具体的に学び、造形表現指導法の仕上げとなる内容にしたい。						
○		教育方法論	授業を進めるに当たり、学生が意欲的に取り組めるように、授業の準備及びまとめ等については、課題出題を通して行う。具体的な事例等を提起し、討論や質疑のやりとりを行い、授業参加を促したい。幼稚園教育の特質や方法、技術、評価など、授業全般を扱い、指導における重要な観察眼の育成、さらには幼児はもちろん保護者との信頼関係の構築におけるスキルなどを重点化して取り組む予定である。メディアを通しての指導方法も必須として扱いたい。各時間においては、学生自身の表現力に留意したい。	2 前	30	2	○		
○		幼児理解論	保育を志している学生には必修科目であるこの科目を通して、幼児理解の基本、保育者としての姿勢について学び、よりよい保育を創り出すための意識を高めることを目指して取り組みたい。その中で、子ども一人一人を理解し評価することは、保育者自身を振り返り評価することにつながることを理解させ、将来幼児教育に携わる者としての自覚をもたせたい。	2 前	30	1	○		
○		教育相談論	子ども達の中には、人間関係のあり方や基本的な生活習慣などに、少なからず問題を抱えているものがある。これらの問題を、保護者が解決できずに担任に相談に来ることが多い。だからこそ、園での子ども達の姿を十分にみつめ、彼らの内面を理解する努力をし、それらの情報を保護者と共有できるようにすることが必要である。 そのために、それぞれの課題を解決するにあたって、グループでの活動を仕組む。その中で、コミュニケーションのあり方を体験しながら学ぶとともに、友達の考え方に触れることにより自分の考え方や視野を広げられるように授業を構成していく。	2 前	30	1	○		
○		教育実習指導 I	子どもの命を預かり、成長や発達に関わる教育職はとても重い使命をもつ職業である。幼稚園教諭を目指す学生にとって授業と教育現場での実習を行うことが今後の進路を決め、将来に向けての大切な体験となる。教育実習とは幼稚園で子どもや保育者と関わりながら、学校で学んでいる保育の理論や実技の実践をし、積極的に体験することでこれまでの知識をより確かなものにしていく場であり、さらに学生自身	2 前	22.5	0.5			○

			<p>が大変成長できる場でもある。幼稚園の先生になりたいという強い思いを原動力にして、教育実習に臨んでほしい。そして、実りある教育実習にするためには実習の目標をしっかりともち、自分から何でも学ぼう、吸収しようという意識と姿勢が必要であり大切である。また今後の教育実習Ⅱにおける自分の課題を見つけることが重要である。</p>						
○		教育実習指導Ⅱ	<p>教育実習Ⅰの体験を踏まえ、幼稚園における実際の保育を積極的に実践することで、幼稚園教育の理解を深める。</p> <p>学内で学んだ理論や技術を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を幼稚園の現場で養い、そして身に付けた知識をより確かなものにしていくことを目的としている。</p> <p>この授業では、幼稚園教諭二種免許状取得に向けた教育実習が有意義に行われるように、事前の心構えや指導計画の作成、事前・事後指導を行うものである。</p>	2後	22.5	0.5			○
○		教育実習Ⅰ	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・おもいやり」「観察眼の育成」を目指して行う。</p> <p>この実習は幼稚園での保育に参加し、幼児への理解を深めるとともに、幼稚園の機能と役割や幼稚園教諭の職務内容について学ぶことをねらいとしている。</p> <p>実習園の行事や実習生の状況に応じて、見学・観察実習、参加実習、指導実習など様々な形式で実習を行い学ぶ。更に、この実習を通して学んだ課題を明確化し、幼稚園教諭としての専門性を高める機会とする。</p>	2前	90	2			○
○		教育実習Ⅱ	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力」「他者への配慮・おもいやり」「観察眼の育成」を目指して行う。</p> <p>この実習では教育実習における保育実践を通して、幼稚園教諭として必要な資質・能力・技術を習得する。また幼稚園の様々な行事への参加や通常の教育活動及びそれ以外の活動を通して、教育的愛情や教育に対する使命感や責任感を養うことをねらいとしている。</p> <p>実習園の行事や実習生の状況に応じて、観察・参加実習、指導実習など様々な形で実習を行う。</p> <p>この実習を通して学んだ課題を明確化し、幼稚園教諭としての専門性を高める機会とする。</p>	2後	90	2			○

○		教職実践演習(幼)	<p>授業を進めるに当たっては、一人一人の学生が積極的に学習内容に関われるよう、グループを中心に展開し、コミュニケーション能力や観察眼の育成に努める。大きくは以下の3点の内容をもとに取り組む。</p> <p>① 乳幼児の理解を深めることを通して、学級経営力や人間関係能力の育成。</p> <p>② 乳幼児の発達と保育内容との関連を学ぶことを通して、幼児期にふさわしい生活の具現化の考察。</p> <p>③ 具体的な事例をもとに、教員としての責務及び役割について考察。</p>	2後	30	2	○		
○		社会福祉	<p>保育士は、子どもに加え親、家族、地域など様々な対象が抱える問題について、共に考え、必要な情報を提供し、関係機関と連携しながら問題解決に当たる専門性が求められる。そのために必要な社会福祉の基本的となる知識の習得を目指す。</p>	1前	30	2	○		
○		相談援助	<p>保育者として、子どもや保護者に接する上で習得しておくべき基本的な対人援助について学ぶ。ソーシャルワークの側面から、保育の事例を通して援助方法について考察する力を養う。理論、演習など様々な角度から相談援助についてわかりやすく参加型を通して体得することを目指す。</p>	2前	30	1	○		
○		児童家庭福祉Ⅰ	<p>子どもや家族のあり方は、少子高齢社会に突入した現代の日本においては大きく変化している。授業は、子どもはどの時代にあっても「社会の主役の一人」という考えに基づき、「子どもの最善の利益」(『子どもの権利条約』)とは何かを常に問いながら展開し、児童家庭福祉の概念や歴史等から学び、今日における課題を具体的な事例から検討し、総合的理解を深める。なお、授業では「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・思いやり」「観察力の育成」に関する基本的手法も適時取り入れて行う。</p>	1前	30	2	○		
○		保育原理Ⅰ	<p>「保育原理Ⅰ」は、幼稚園・保育所は一体何をする場所なのか、そこはどのような仕組みになっているのか、それぞれの特徴は何であり、どこが違い、どこが同じなのか、それぞれどのような社会的役割を果たしているのかなどについて専門的な知識・理解を修得することに主眼を置き、両者のそれぞれについて概説していきます。</p>	1前	30	2	○		
○		保育原理Ⅱ	<p>「保育原理Ⅱ」は、「保育原理Ⅰ」で修得した知識と理解を前提に、幼稚園・保育所における保育内容の考え方、保育内容の分類とそれぞれの特徴、その組織的編成と</p>	1後	30	2	○		



			計画の作成、指導と援助の原則、保育形態と活動形態、保育方法の諸原則などの専門的知識・理解を修得することに主眼を置き、概説していきます。						
○		社会的養護 I	少子高齢社会を迎えた日本では次代を担う「子ども」の心身とも健やかな育成が大変重要な課題となっており、従来の考えでは捉えきれない新しい課題も出てきている。授業では大きく変化する社会的養護について、その理念や歴史を学びながら、今日における課題を明らかにし、その援助の考え方や方法等について理解を深め、具体策を検討する。なお、授業では基本的目標の「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・思いやり」「観察力の育成」に関する基本的手法も適時取り入れる。	1 後	30	2	○		
○		保育実習 I (保育所)	実習は、保育実習での意義や目的を理解するとともに、「コミュニケーション能力の育成」「他者への思いやり」「観察力の育成」を目指して行う。併せて、子どもの最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務について理解する。 この実習を通して学んだ課題を明確化し、次回の実習へ前向きに取り組めるようにする。	2 前	90	2			○
○		保育実習 I (施設)	施設実習は保育所以外の福祉施設に行き学校で学んだことを体験し、保育士として必要な技術や支援の実際を知る。また、そこでは保護者とどのようなコミュニケーションを図っているかを学び、コミュニケーション能力の向上に役立てさせる。一年次で学習してきた発達過程や育ち、様々な環境の違いを現場の子ども（利用者）の姿から読み取り、現状とその背後にあるものをイメージすることができるようにする。実習の目標が達成できたかを自己評価し、自己覚知につなげる。	2 前	90	2			○
○		保育実習指導 I (保育所)	保育所での保育実習の意義や目的を理解すると共に、保育所における子どもの人権や、最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解できるようにする。 実習の計画、実践、観察、記録、自己評価の方法や内容についても、観察眼を育成しながら具体的に理解できるようにする。実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い自己を客観的に捉え、自己覚知できるようにする。	1 後	30	1	○		

○		保育実習指導Ⅰ（施設）	<p>実習では子ども（利用者）との関わりを通じて、観察力を育成しその理解を促し、具体的な援助の方法を体験することで、社会的に養護が必要な人たちへ保育士としての役割と職業倫理を学ぶ機会とする。</p> <p>施設における子ども（利用者）の人権と最善の利益は何かを常に意識して実習をすることで、他者への配慮や子ども観や人間観の形成、自分自身の生き方を考える。</p> <p>実習の事後指導を通じて振り返りと自己評価を行い、課題について考える力を身に付ける。</p>	2 前	30	1		○
	○	保育実習Ⅱ	<p>保育所保育士として必要な姿勢や態度及び指導の方法・技術等を習得するとともに、「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・思いやり」「観察力の育成」を目指して行う。</p> <p>「保育実習Ⅰ（保育所）」での保育所実習の経験をもとに、自ら実習先保育所を選択して実習することにより、保育所の目的と機能課題等より深く理解する。</p>	2 前	90	2		○
	○	保育実習指導Ⅱ	<p>実習という具体的な実践の中で、子どもの観察やかかわりの視点を明確にし、保育の理解や保育所の役割機能についての理解が深められるようにする。</p> <p>既習の教科や保育実習Ⅰ（保育所）の経験を踏まえ、子どもの保育や保護者支援について総合的に学ぶ。</p> <p>保育の計画を立て、実際に設定保育を実践する。記録には、的確な記述が求められるが、その為の観察眼の育成に努める。</p> <p>具体的な実践と結び付ける中で、保育士の業務内容や、職業倫理について学びを深めるとともに保育士としての自己課題を明確に意識できるように努める。</p>	2 前	30	1		○
	○	保育実習Ⅲ	<p>実習は基本的目標「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・おもいやり」「観察力の育成」を目指して行われる。</p> <p>この実習では主に居住型福祉施設等で職務遂行を行う保育士として必要な能力や技能を充実・伸張することをねらいとしている。具体的には子どもや利用者のニーズについて理解し、その対応方法や援助計画の立案と実践、家族とのコミュニケーションの方法や地域との連携等の実際を学ぶ。さらにこの実習を通して学んだ課題を明確化し、保育士としての専門性を高める機会として位置付ける。</p>	2 前	90	2		○

○	○	保育実習指導Ⅲ	施設での保育実習の意義と目的を理解し、保育・養護について総合的に学び、施設での実習や既習の教科の内容やその関連性を踏まえ、保育実践力を培うとともに、施設での保育士の専門性と職業倫理について理解する。さらに実習の事後指導における自己評価を通して、自己の課題や認識を明確にする。	2前	30	1	○		
○		子どもの保健Ⅰ-①	小児の発達、発育および身体の解剖・生理、生活全般の関わり、精神保健の理解及び疾病や緊急時の対応などを学び、演習や実習に発展することができる。	1前	30	2	○		
○		子どもの保健Ⅰ-②	小児の正常な発達、発育および身体の解剖・生理などを理解したうえで、小児に特徴的な疾患や応急手当に適切に対応できる知識を習得するとともに、演習や実習に発展することができる。 さらには近年の社会情勢を踏まえ虐待や地域との連携など幅広い見地を養い、あらゆる場面で適切に対応できるための資質の向上を図る。	1後	30	2	○		
○		子どもの保健Ⅱ	小児に対する基本的な養護技術、健康状態の把握および異常時の対応について、正しく対応するための具体的な技術等について実習を行う。	1後	30	1	○		
○		保育の心理学Ⅰ	乳幼児期を中心に子どもの発達に関わる心理学の基礎を習得する。乳幼児期は心身の変化も激しく、人生の基礎をつくる時期でもある。情緒・運動機能・知覚・認知・ことばなど、乳幼児期の発達を発達の側面別に見ていく。実習などで子どもを観察する力につながるはずである。また、講義中に学生同士で意見を交換する機会を設け、自分で考え、表現してほしい。	2前	30	2	○		
○		保育の心理学Ⅱ	演習であるため、発表やグループワークを取り入れ、保育実践に関わる心理学の知識を応用し理解を深めることを目指す。学生同士のコミュニケーションの機会を多く設け、話を聞くだけでなく自分で具体的に考えることで、子どもへの観察眼も育成も目指す。	2後	30	1	○		
○		子どもの食と栄養Ⅰ	・小児期における心身の発達や発達過程を知り、適切な食事支援ができるよう小児栄養の基礎知識を身につける。 ・食生活の具体的な場面を通して、食事のバランスについて考え、正しい食生活の基礎作りの習得を目指す。 ・調理実習等を通じて、基礎的な調理技術を取得し、子どもにとって適切な食生活の支援ができるようにする。	1前	30	1	○		

○		子どもの食と栄養Ⅱ	<p>成長期(妊娠期から幼児時、学童期まで)に対応した栄養と食生活について、視聴覚教材や調理実習等を通して具体的に理解させる。食育活動に関する教材として、紙芝居などの食教育媒体の作成を行う。家庭および児童福祉施設における栄養と食生活について、食育に関心をもたせる。</p>	1後	30	1	○	
○		保育内容総論Ⅰ	<p>保育内容を実践に即して総合的にとらえる視点を学ぶことができるようにする。その為に、机上のものに留まらないよう、具体的に伝えイメージしやすい授業内容とする。</p> <p>また、保育とは何かということを理解し、総合的な指導ができるよう「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」に基づいて考察する。指導計画案の作成演習と検討を通して、子どもの発達の捉え方、生活と遊びの意味などを5領域と関連付けて、保育者として総合的な関わりができるようにする。</p>	1前	30	1	○	
○		社会的養護内容	<p>「社会的養護Ⅰ」においてすでに学んだ基礎知識を発展させ、児童福祉施設等を利用している子どもの立場から、具体的な子どもの生活や援助の方法について学ぶ。また子どもの心身の成長と発達を保障するために、正しい子どもの理解や養護の専門知識と技能を習得する。</p> <p>なお、この授業は演習方式で展開するため、基本的目標である「コミュニケーション能力の育成」「他者への配慮・おもいやり」「観察力の育成」を目指し適時発表・報告や文書による連絡方法等の手法も取り入れる。</p>	2前	30	1	○	
○		保育相談支援	<p>保育者が行う家庭支援の基礎知識や基本姿勢を習得する。保育相談支援とは何かを理解した上で、事例を通して支援内容方法について理解を深めたい。子どもの健やかな育ちを目指した保育相談支援の技術について学び、保育現場でどのような支援が最適であるか理解すると共に実践力を養う。</p>	2後	30	1	○	
○		乳児保育Ⅰ-①	<p>人の一生は、乳幼児期にどんな大人とかわったかで大きく左右されるといわれる。一日の大半を過ごす場所である保育所において、関わる時間の長い保育者の役割や、責任の重さは計り知れない。そこを深く認識し、保育所保育指針に学びながら0歳児の発達の特徴を知り、0歳児の生活を理解したうえで保育者の援助はどうあるべきかを学習する。また、乳児の生活や遊</p>	1前	30	1	○	

			<p>びの実態を知り、乳児保育の計画・記録・評価の方法を理論づけて学ばせていく。</p> <p>事例等をできるだけ具体的に上げ、参加型体験学習を取り入れていく中で、コミュニケーション能力の育成を図る。</p>					
○		乳児保育Ⅰ-②	<p>人の一生は、乳幼児期にどんな大人とかがかわったかで大きく左右されると言われる。保育所は一日の大半を過ごす大切な場所であるとともに、保育者とかわる時間も長くその役割は重要なものであり、責任の重さも計り知れないものがある。そこを深く認識する為に保育所保育指針に学びながら、発達の特徴を知り、乳児の生活をより良く理解した上で保育者の援助はどうあるべきかを学習する。現場の乳児の生活や遊びの実態を知り、乳児保育の計画・記録・評価の方法を理論づけて学んでいく。</p> <p>講義を中心に行うが、現場の事例を具体的に話し、参加型体験学習を取り入れ、進めていく。</p>	1 後	30	1		○
○		障害児保育Ⅰ	<p>障害のある子ども達を「特別な支援を必要とする個性をもった子ども達」ととらえ、その人権を尊重した関わりができるような学習をおこなう。このためには障害をどうとらえるか、歴史的な変遷も理解し、それぞれの子ども達に応じた思いやり等の配慮の仕方を、実践的な方法で学び、子ども達やその保護者と共に育ちあう立場が取れる保育士の育成をめざす。單元ごとに手遊びや教材などの現場で役立つ実技や、ロールプレイによるコミュニケーショントレーニングを取り入れる。</p>	1 後	30	1		○
○		障害児保育Ⅱ	<p>前期の講義や施設実習での学びを踏まえて、障害児(者)とどう関わるかを考えてもらう機会とする。ロールプレイ等のグループワークを通じて、障害についての理解を深め、コミュニケーション能力を向上させ保育士としての“気づき”や“感性”を育成し、障害児保育を「知る」「わかる」「できる」等、これらの実践力が身につくようにする。</p> <p>現場で使える教材の紹介や作成を行い、発表しあう体験学習をおこなう。</p>	2 前	30	1		○
○		家庭支援論	<p>家庭の意義と機能について理解し、子育て家庭を取り巻く社会状況についての現状理解できるよう、具体的にイメージできるように教科書を中心としながら資料やDVDを利用し進めていく。</p> <p>観察のポイントを押さえた上で、子育て</p>	2 後	30	2		○

			<p>支援施設を見学し、振り返りのまとめやグループワークの中で、関係機関との連携の実際を、演習を通し理解できるようにする。</p> <p>コミュニケーション能力の育成や 他者への配慮・思いやりの育成を図る。また、子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開と関係機関との連携の実際を、演習を通し理解できるようにする。</p>						
		○	<p>音楽Ⅲ（器楽）</p> <p>音楽Ⅲ（器楽）では、保育者として必要なピアノ技術の向上と、弾き歌いの演奏技術を習得する。また、1年次の後期試験曲や得意な曲などを常にレパートリーとして保持できるよう指導する。保育における音楽活動はピアノ技術のみで行われるのではなく、保育者の感性や創造力(想像力)・教材を発展させる幅広い知識が必要である。また、自らの感性をもって表現していく力をつけることで、子ども達の心情、意欲、態度を向上させ音楽活動を通してより円滑なコミュニケーションを図れる力をつけていけるように指導していく。</p> <p>子どもの育ちに即した内容に展開できるよう、伴奏付けやアレンジなどの演奏技術も個人のレベルに合わせて指導を行う。</p>	2 前	30	1		○	
		○	<p>音楽Ⅲ（声楽）</p> <p>音楽Ⅲ（声楽）では、わらべうたの実践（しぐさ遊び・役交代・交互唱・門くぐり・隊伍遊び他）を体得する。並行して個々の歌唱力の向上と、より美しいハーモニーを目指す。</p>	2 前	30	1		○	
		○	<p>音楽Ⅳ（器楽）</p> <p>音楽Ⅳ（器楽）では、保育者として必要なピアノ技術の向上と、弾き歌いの演奏技術を習得する。また1年次の後期試験曲や得意な曲などを常にレパートリーとして保持できるよう指導する。保育における音楽活動はピアノ技術のみで行われるのではなく、保育者の感性や創造力(想像力)・教材を発展させる幅広い知識が必要である。また、自らの感性をもって表現していく力をつけることで、子ども達の心情、意欲、態度を向上させ音楽活動を通してより円滑なコミュニケーションを図れる力をつけていけるように指導していく。</p> <p>子どもの育ちに即した内容に展開できるよう、伴奏付けやアレンジなどの演奏技術も個人のレベルに合わせて指導を行う。</p>	2 後	30	1		○	
		○	<p>音楽Ⅳ（声楽）</p> <p>音楽Ⅳ（声楽）では、個々のより高い歌唱力の向上と、保育現場に対応出来る知識及び演習力、各々の教材（子どもの歌）の展開を学ぶ。</p>	2 後	30	1		○	

		○	保育内容総合演習	①子どもの発達年齢を決定し、素材群から教材を選定する。 ②その教材をどのように展開していくか、グループで協議し、保育案（細案を含む）を作成する。この時に、子どもの発達に応じた指導のあり方や環境構成については十分に考えさせるとともに、不足している場合はその場で教師サイドから補填すること。 ③実際に進めるために必要な教具や発問計画を準備する。	1 後 2 前	30	1	○	
合計				74 科目	単位時間 ( 99 単位)				